



農業經濟論

大内 力 編著

第二版 經濟学全集 20

筑摩書房

第二版 経済学全集 20 農業経済論

著者略歴

おうち つとむ

大内 力

1918年東京に生れる。1942年東京大学経済学部卒業。理論経済学、農業経済学、日本経済論を専攻。現在、東京大学経済学部教授。
〈著書〉『日本資本主義の農業問題』（改訂版1952年、東大出版会）、『日本農業の財政学』（1950年、東大出版会）、『農業恐慌』（1954年、有斐閣）、『地代と土地所有』（1958年、東大出版会）、『農業史』（1960年、東洋経済新報社）、『農業問題』（改訂版1961年、再訂版1977年、岩波書店）、『日本経済論』上・下（1962、63年、東大出版会）、『アメリカ農業論』（1965年、東大出版会）、『日本における農民層の分解』（1969年、東大出版会）、『現代アメリカ農業』（1975年、東大出版会）

わたなべ ひろし

渡辺 寛

1931年東京に生れる。1953年一橋大学経済学部卒業。農業問題を専攻。現在、東北大学経済学部教授。

〈著書〉『レーニンの農業理論』（1963年、御茶の水書房）、『日本のマルクス経済学』上・下（共著）（1967-68年、青木書店）、『帝国主義の研究』第I・II巻（共著）（1973-75年、青木書店）、『レーニンとスターリン』（1976年、東大出版会）

ばばひろじ

馬場宏二

1933年群馬県に生れる。1962年東京大学大学院経済学研究科修了。世界経済論、農業経済論を専攻。現在、東京大学社会科学研究所助教授。

〈著書〉『アメリカ農業問題の発生』（1969年、東大出版会）、『世界経済——基軸と周辺』（1973年、東大出版会）

なかやまひろまさ

中山弘正

1938年佐世保市に生れる。1966年法政大学大学院博士課程修了。ロシア・ソヴェト経済論を専攻。現在、明治学院大学経済学部教授。

〈著書〉『現代ソヴェト農業』（1976年、東大出版会）

第13回配本 初版1刷 1977年3月30日発行

編著者 大内 力・渡辺 寛
馬場宏二・中山弘正

発行者 井 上 達 三

筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町 2-8
振替東京6-4123 Tel. 291-7651(代)
郵便番号 101-91
印刷・厚徳社 製本・和田製本

© T. Ouchi, H. Watanabe, H. Baba,
H. Nakayama Printed in Japan

(分類) 3333 (製品) 40820 (出版社) 4604

は し が き

本書は『農業経済学』の概論であるが、一般の『農業経済学』の書物にくらべたばあい、多少特殊性をもっているかもしれない。とくに、一般には『農業経済学』の書物といえ、日本農業の問題にそうとうの紙数をさいているものが多いが、本書では日本農業に關説することは、すべて省略してある。もちろん日本農業の問題が重要でないというのではない。というよりは、日本の農業問題の解明こそ、日本の農業経済学にとって、最終の課題といつていいであろう。ただ、日本農業についてはきわめて多くの研究書があるし、他方、日本農業の問題を正しく知るために、前提として明らかにしておかなければならない事実は多々あるのだから、むしろそういう点に焦点をあつめた書物があつてもいいだろうというのが著者の狙いである。

本書では、『農業経済学』の基礎理論に相当する部分を段階論として解明するために、まず第1篇でイギリスおよびドイツにおける資本主義の発展と農業の展開とを取扱っている。ついで第2篇では、『農業経済学』の現状分析論の一部として、現代におけるアメリカおよびインドの農業問題を解明した。第3篇は、社会主義が、資本主義の遺産として受けついだ農業問題を、どこまで解決でき、またどこまで解決できないでいるかを明らかにし、この問題への歴史的展望を与えるいみで、ソ連邦の農業問題の分析にあてられている。

このような篇別構成と問題の設定は、これで十分だとは、著者自身もちろん考えてはいないが、けつして便宜的・恣意的にきめられたものではなく、一定の方法論的な根拠をもっている。それについては序論がその解明を与えるであろう。

ともかく本書が、これまで日本で、比較的手薄であつた部分を補ひ、初学者が農業経済の研究にはいるにさいして、必要な前提的知識を提供する役割を果すであろうことを著者は期待している。

本書は、あらかじめ定められた計画にもとづいて、序論を大内力、第1篇を

渡辺寛，第2篇を馬場宏二，第3篇を中山弘正が分担して執筆したものである。しかし全体をつうじて大内が，そうとう大幅に加筆をしたり削除をしたりしているので，主たる責任は大内にある。分担執筆にともなう不統一や細部の不一致やが，なお多少はのこっているかもしれないが，他面，これだけの広汎な分野は，一人の著者の能力ではとうていカヴァーできないものであるから，共同執筆の方法をとったことは，本書の長所にはなっても短所ではなかったとひそかに自負している。いずれにせよ，いろいろ困難な制約のなかで，共同の仕事によく協力してくれた執筆者諸君に，編者として厚く感謝の意を表しなければならない。

本書は，共同執筆にともなう煩雑な手数が予想外にかかったために，刊行が大変おくれってしまった。そのため筑摩書房，とくに編集の田中基子さんには大きなご迷惑をおかけする結果になった。この機会にお詫びを申しあげるとともに，編者のわがままを許していただいたことにたいし，厚く御礼を申しあげたい。

1967年10月中旬

東京大学経済学部研究室にて

大内 力

第二版への序

本書の改訂にあたっては，若干の新しい資料をくわえたり，最近の事実にもとづく追加をおこなったりしたが，基本的な骨組みと論旨は変更をくわえなかった。この10年間に，日本農業も世界農業も大きな変貌をしめしているが，その動きを理論的に理解するために，本書はそう大きな変更をくわえなくとも十分役立ちうるというのが，著者の見解である。

1977年2月中旬

大内 力

第2篇 現代資本主義の農業問題	195
序章 概 観	195
第1章 アメリカにおける農業問題	199
1. アメリカ農業の存立条件	199
2. 農業生産の構造	221
3. 農民層の分解	244
4. アメリカ農業問題の所在	263
第2章 現代インドの農業問題	269
1. インド農業の環境	269
2. 農業生産の構造	285
3. 農民層の分解	305
第3篇 社会主義の農業問題	323
序章 概 観	323
第1章 ソ連邦の農業問題	327
はじめに	327
1. 集団化から、戦後復興期まで	328
2. フルシチョフ農政の展開と結果	337
3. ブレジネフ期の政策と構造	357
4. 現代ソ連邦農業の問題点	379
おわりに	392
参考文献	393
事項索引	401
人名索引	407

目 次

は し が き

序論 農業経済学の課題	3
1. 農業経済学の課題	3
2. 農業問題の本質	22
3. 本書の構成	32
第1篇 資本主義と農業	35
序章 概 観	35
第1章 イギリス農業の展開過程	38
1. 中世の農業制度	38
2. 荘園制度の解体	48
3. 重商主義段階	55
4. 自由主義段階	76
5. 帝国主義段階	99
第2章 ドイツ農業の展開過程	117
1. 中世の農業制度	117
2. 荘園制度の変質	120
3. 資本の本源的蓄積(1)——「農民保護」	130
4. 資本の本源的蓄積(2)——「農民解放」	139
5. 自由主義段階	152
6. 帝国主義段階	174

農業經濟論

序論 農業経済学の課題

1. 農業経済学の課題

a. 農業経済学とは

農業経済学 agricultural economics とか、農業政策（農政学 agricultural policy）とかよばれる学問が、¹⁾経済学の一研究分野であること、よりくわしくいえば、経済政策学の各論を形成する一分野であることは、今日一般にみとめられている事実である。しかし農業経済学がより具体的に、何を研究対象とし、どのような課題をもつか、ということになると、まったく千差万別²⁾の理解がもたれており、けっして一つに統一されているわけではない。農業経済学というような銘をうった書物があらわれるようになったのは、19世紀中葉以降、ドイツ歴史学派によるものが最初であろうが、その後今日まで、外国でも日本でもこういう種類の書物は²⁾何千冊となく著わされている。しかし、その内容は多種多様であって、むしろわれわれの理解の混乱をますばかりだといってもいいくらいである。

農業経済学というからには、農業についての経済学的研究、あるいは農業という産業分野にあらわれる経済現象の研究がその課題であることには、いちおう問題はないであろう。だが、そういっただけでは、あまりに抽象的であって、具体的内容はいぜんとして不確定である。

もっともわれわれは、そのばあい、農業とは何かというような、スコラ的な議論にはあまりかかずらう必要はない。農業と林業の境界とか、農業と工業の

-
- 1) この二つのよび名は日本では混在しているが、この両者に本質的な差があるわけではない。がいして、農業経済学というのはイギリス流のよび方であり、農政学 Agrarpolitik というのはドイツ流のよび方であるが、今日別にそういう伝統がそのままつづいているわけではない。
- 2) このいみで W. Roscher, *Nationalökonomie des Ackerbaues*, 1859, Stuttgart, などのもっとも早いものであろう。

境界とかいうものも、考えてみればそう判然としたものではなく、多分に便宜的なものであるが、すくなくともその中核的部分についていえば、農業とは何かということは、常識でもわかることだし、いまのばあいそれで十分である。

問題はむしろ経済学的研究とか経済現象の研究とかのほうにある。経済学は何を研究するのか、経済現象の研究とは何を課題とするのか、それははっきりしているようで、じつはすこしもはっきりしていない。それは今日でも、マルクス経済学とか近代経済学とかという学派によってもいちじるしく異っているし、たとえばマルクス経済学のなかでも、学者によってかなり意見のわかれるところである。

しかし、ここでは経済学全体の方法なり課題なりを論ずることは目的ではないから、農業経済学に即してこの問題を考えてみよう。

b. 農業経済学と資本主義

今日では、さすがにそういう書物はすくなくなつたが、一時代まえには、農業経済学といえば、農業のもつさまざまな特殊性——土地に密着した産業であつて、自然的な条件に支配されることが多い、といったような——をあげ、それから農業の歴史的発展や土地所有のさまざまな型や、三圃式、輪栽式といった土地利用の方式や、さまざまな農業政策のやり方や、——そういうものを³⁾ごたごたと説明してゆくような書物がきわめて多かった。こういう書物に共通していることは、経済の歴史的発展によってつくりだされるさまざまな社会体制にたいしてほとんど配慮することなく、ひたすら農業の特殊性を解明することに焦点があつめられているということである。いいかえれば、それは、農業の歴史のごときものもいちは扱いながら、真のいみでの歴史的感覚を完全に欠如したものであるということができよう。

この点は、農業経済学にとっては、とくに厄介な問題であつた。というのは、工業とか商業・金融とかというのと異つて、農業はきわめて古い歴史をもつ生

3) さきにあげたロッシヤーの書物などもその代表的なものである。

産部門である。もちろん工業等々にしても、資本主義以前にもあるていどの発達はみられたにちがいないが、農業は、人類が狩猟・採取の段階をぬけだし、農耕をいとなむようになった昔からはじまる生産活動であり、しかも封建社会にいたるまで、つねに中心的な生産分野をなしてきた。他方、反対に、農業は資本主義社会になっても、その古い生産体制をなかなか揚棄することができず、多くの国では久しきにわたって、数百年来同じような生産様式が維持されるという事実があった。こうしたことから、農業に着目すると、こういう長い農業の歴史をつうじてみられる農業一般の特殊性がとくに人目をひき、社会体制の変化といったものがつい看過されてしまうことにもなったのであろう。

しかしこういうタイプの研究が農業経済学でないことはいうまでもない。なぜなら経済学は、社会科学であり、経済社会がどのような運動法則にしたがって動いているかを明らかにすることを目的としている。他方農業生産は、たとえそれだけを切りはなしてみると、何百年ものあいだ、同じような生産活動がくりかえされているようにみえることがあっても、けっしてそれを包む社会全体から孤立して存在しているものではなく、経済社会の一構成部分として、一体をなしながら動き、変化してゆくものである。そういう観点を無視してしまい、ただ農業生産一般の特殊性などということを論じてみても、それはせいぜい常識に多少の整理をくわえていどのことになってしまっただけで、経済学にはなりえないのである。

このいみで、われわれにとってまず明らかなことは、農業経済学も経済学であるからには、それは農業という生産活動がどのような社会的関係のなかでおこなわれているか、当該社会全体の動きとどう関連しているか、そしてそういうものとしてどういう歴史的变化のなかにあるか、といったような点の解明を、さしあたり課題としなければならないということであろう。農業を社会関係から切りはなしてしまい、いわば人間の自然にたいする働きかけの側面だけでとらえようとするような視角は、経済学とは無縁なのである。

だが、このように農業を社会的関連のなかにおいてとらえるということになると、そこからすぐ新しい問題が生じてくる。というのは、周知のように、社会関係なるものは、歴史的にたえず変化をつづけていく性質をもっているから

である。しかもこの変化は、もちろん一面では、たえずすこしずつ、いわば量的に変化をしてゆくという形をとるが、他面ある時期には、比較的短いあいだに、根本的な、いわば質的な変化が生ずるという形をもとめるものである。後者のような変化をかりに体制的変革とよんでおくならば、そういうものが過去の社会の歴史のなかで、すくなくとも数回はあらわれていることは、だれでも知っている事実であろう。つまり歴史は、もちろん一面では連続的なものであるが、これを社会体制の側面からみれば、断続的・段階的な変化をとげてきたもののなのである。

社会関係がこのように段階的に変化するものであるとすると、われわれがそれを学問的にとり扱うというばあいには、これをすべて一括して、あらゆる体制をつうずる社会関係一般という形で研究をするわけにはゆかないことになる。それではわれわれの知識はきわめて抽象的な、漠然たるものになってしまつて、具体的な、細部にわたる問題にまで接近することができなくなってしまうからである。もちろん、こういう社会関係一般についても、ある認識をもつ必要はあるかもしれない。しかしそれは、まずそれぞれの体制について、より立ちいった具体的な知識をもつたうえで、それをいわば総括することによってえられる知識であつて、いきなり社会関係一般が把握できるものではないのである。さきに問題にしたような、古い農業経済学が、歴史的感覚を欠いているというのも、それは歴史のこういう段階的な変化を意識せず、せいぜい抽象的に社会関係一般を考えているにすぎないからなのである。

ところで、いまわれわれは、それぞれの体制について具体的な知識をもたなければならない、と述べたが、そのばあい、あらゆる社会体制について、同じ密度の知識が必要だということにはならないであろうし、また、どういう社会体制から研究をはじめてもいいということにもならないであろう。結論を先にいってしまえば、経済学にとってまず問題になるのは、そしてまず研究対象とされなければならないのは、資本主義という特殊歴史的な経済社会の体制なのである。

なぜそうなるのか、ということは、一面ではあるていど便宜的なことである。すなわち、今日、すでに世界の1/3は社会主義体制に移行しているとはいふも

の、資本主義はいぜんとして支配的な体制である。そしてわれわれも現にこの体制のもとに生活している。したがって、われわれがまず知らなければならないのは、資本主義であり、農業にしても、それが資本主義体制のなかで、どのような運動をしているかということであろう。

しかし、たんにそれだけではなく、そこにはもうすこし本質的な理由がある。この点、ここでは深く立ちいることはできない⁴⁾が、つぎのことだけはどうしても指摘しておかなければならない。すなわち、もともと資本主義よりまえの社会では、社会の経済といっても、その大部分は共同体的な関係のなかで、伝統的慣行にしたがって自給自足的におこなわれていた。そこでここでは、経済社会の構造は、きわめて単純なものであり、ことさら学問的な分析を必要とするようなものではまだなかったといっている。のみならず、こういう社会では、経済的諸関係といっても、それが一つの自律的な運動をしていたわけではなく、共同体的慣習・政治的強力・宗教的呪縛といったような、さまざまないわゆる上部構造とわがちがたく絡みあいながら、一体をなして存在していたにすぎない。経済とか政治とかといった区別は、むしろブルジョア社会ができあがってから判然としてくるものであり、それ以前の社会についても、いちおうそういう区別をしながら、これを理解しようとするのは、むしろブルジョア社会の経験を経たわれわれがあとからおこなうことにすぎないのである。

これにたいして、資本主義経済は、まったく異った性質をもっている。ここでは、経済的諸関係が全世界にわたるものにまで拡大され、きわめて多面的な、複雑なものになるだけでなく、経済関係がすべて商品経済関係で一元的に処理されるものになるために、いわゆる下部構造として、自律的な法則性をもって運動するようになるのである。それは別の面からいえば、経済現象が個々人の意思からは独立し、あたかも自然法則のような必然性をもって人間を支配するにいたるということでもある。

こういう事実があるために、資本主義社会が成立するとはじめて、この社会の運動法則を科学的に分析し把握する経済学なる学問が成立することになった。

4) さしあたり、大内力・戸原四郎・大内秀明『経済学概論』、1966年、序章をみよ。

それは、上述の点から明らかなように、一面では、資本主義社会になると、どうしてもそういう科学をもつてしなければ、経済社会の構造や運動を理解しえなくなるからでもあるが、同時に他面、対象となる経済現象が、科学的研究の対象となりうるような、法則性をもった運動を展開するようになるからでもある。経済学が17世紀ごろ、イギリスで資本主義の発達が始まるのにおうじて、まずイギリスで芽生えたということは、このいみでけっして偶然ではないのである。

もちろん経済学がこのように資本主義体制を対象として成立するということは、それが資本主義以前の経済体制や、あるいは社会主義の経済体制やを、まったくその研究対象から排除してしまうといういみではない。しかし、たとえばわれわれが封建社会の経済を研究するにしても、それは資本主義経済についてえられた理論をもって、封建経済を分析し、資本主義との差異を解明するのであって、封建経済自体について、理論体系が形成されるわけのものではないといわなければならない。

c. 農業と純粋資本主義

さて、こういうわけで、経済学の直接の研究対象が資本主義経済であり、いろいろな体制について具体的な知識をもつといっても、それは資本主義社会を基準としてはじめてなしうることだということは明らかであるが、そうなってくると、農業経済学においても、それは資本主義体制のなかに組みこまれた農業の研究を中心課題とするという問題意識がもたれるようになる。事実、比較的新しい農業経済学の書物は、マルクス経済学のばあいにはきわめて明確に、また社会体制という意識を明確にもたない近代経済学のばあいには、やや漠然と、資本主義経済のなかにおける農業について、運動法則を明らかにすることを主要な課題としているといってい。

だが、ここまできても、じつはまだ問題がのこる。というのは、資本主義経済のなかにおける農業と一口にいても、それはどういう資本主義なのかということが、かならずしも判然としていないからである。いいかえれば、資本主義と一口にいても、16-17世紀にそれがはじめてイギリスに芽生えたころと、

今日のように、それが国家独占資本主義とよばれるほどに発達した時期とでは、その性質、様相はいちじるしく異っているし、農業のあり方もいちじるしく異っている。また、イギリスの資本主義とドイツの資本主義、アメリカや日本のそれ、というふうに並べてみれば、それぞれのあいだにも大きな性質のちがいがあり、それがまた農業にもいちじるしく異った様相をつくりだしている。こういう複雑多岐な資本主義の、どこをどうおさえて、資本主義経済のなかにおける農業の運動法則を明らかにすればいいのであろうか。

そのばあい、一つの考えられる答えは、われわれにとって最大の関心事は、何といっても日本なのだから、日本の資本主義を考え、そのなかにおける農業の動きをとらえればいいのではないか、ということである。そして、それはあるいみでは正しい。たしかに農業経済学にとっても、その最後の目的は、日本の農業について、とくに今日の日本農業のもっている問題なり、その展開の方向なりについて、正確な、科学的知識をもつことにあるといえよう。しかし、それが最終の目的だとしても、われわれは、じつは、いきなりその点に問題をしぼることはできないし、それではかえって何もわからないことになってしまうのである。

それはけっして、日本の資本主義もまったく孤立した存在ではなく、たえず外国からの影響をうけているし、農業もその例外ではない、というだけのことではない。たしかにそれも重要であり、そのためにも、外国の資本主義なりそのなかにおける農業なりについての正確な知識なしには日本について語りえないということにならざるをえないであろう。だが、問題はもうすこし本質的なところにある。

そのことは、たとえば日本資本主義といういい方を一つ考えただけでも明らかであろう。すなわち、それは資本主義とよばれている以上、いかに日本的な特徴があるにもせよ、何らか本質的な点において資本主義社会としての性質をもっており、そのかぎりでは、他の多くの資本主義社会と共通の点を備えていると考えなければならない。とすれば、われわれはまず資本主義とはどういう経済体制であり、どのような運動法則にしたがっているかを、一般的に理解しておかなければ、日本資本主義をも理解しえないということになるであろう。

同じことを別の面からいえば、こうもいえよう。われわれが日本資本主義について知るといことは、その特徴なり、特殊性なりを明らかにするということでもある。しかし、特徴といい特殊性というものは、あくまでも相対的なものである。つまりそれは、他の資本主義との、あるいは資本主義一般との、比較においてはじめていえることであって、絶対的な特殊性などというものはないのである。そして、資本主義全体についてそうである以上、そのなかにふくまれる農業についても、ことは同じであろう。

そこで、農業経済学にしても、日本資本主義のなかにおける農業の運動法則を知るまえに、その前提として、どうしてもまず資本主義のなかにおける農業の運動法則を一般的に明らかにしてかからなければならない、ということになる。だが、これがまたなかなか厄介な問題をふくんでいるのである。

このばあい資本主義一般というのは何であろうか。資本主義は、各国別にいろいろの特殊性をもっており、しかもそのおのおのが、歴史的にも変化してゆく性質をもっていることは、まえにも示唆したとおりである。そういうものをつうずる資本主義一般というのはどのようにしてこれを把握することができるのであろうか。

これにたいする一つの答えはつぎのようなものであろう。すなわち、資本主義の一般像は、すでに理論経済学において与えられている。これをマルクス経済学の立場からいえば、『資本論』において、前提されるとともに理論的解明を与えられている資本主義こそ、資本主義の一般像にほかならない、ということである。周知のようにマルクスは、『資本論』においては、資本主義の、攪乱的諸条件のもっともすくない、いわば実験室の状態を想定することによって理論的な展開をなしうるものとしているが、このようにして与えられた、いわゆる純粹資本主義こそが、資本主義の一般像だというわけである。

農業経済学においても、こういう立場からまず農業経済学の原理論を組み立てようとする考え方がおこなわれている。もちろん近代経済学によるばあいは、資本主義像がかならずしも厳密に組み立てられているわけではなく、ときどきに恣意的なモデルが組み立てられる形をとるので、事態はかならずしも明確ではない。しかし、マルクス経済学に立ちつつ、たとえば地代論からはじめて、